

# 調伏曾我

宮増作

前

ツレ 源頼朝

立衆一同 従者

シテ 工藤祐経

ワキ 箱根の別当

子方 箱王丸

後

ワキ 前に同じ

ワキツレ 従僧

シテ 不動明王

地は 相模

季は 雑

一同次第 「海山かけて行く雲の。く。箱根の寺に参らん。

頼朝詞 「抑是は兵衛佐頼朝とは我事なり。

一同 「夫れ治まれる御代のしるし。東南に雲をさまつて。

西北に風静かなり。

頼朝 「ことさら当時一統の。道も直なる文武の二つ。

一同 「何も叶ふ時代とて。

頼朝 「国見も是か坂峰や。

一同 「箱根詣での御為めに。

頼朝 「明くるを待つや星月夜。

一同道行 「鎌倉山を朝立ちてく。まだ有明の影残る。雲こ

そ匂へ朝日影。西に向ひて行く雲の。富士の高根  
の程を知る。足柄山を分けすぎて。梢に浪を湖や。

箱根山にも着きにけり。く。

シテ詞 「やがて御社参あらうずるにて候。

ワキサシ 「此程の日数待たれて今日すでに。鎌倉殿の御参詣。  
是を物見と此寺の。老若の衆徒兒童。数をつくし

て我もく〜と。皆面々に誘へば。

子「人なみくに箱王も。かたへの児にさそはれて。

講堂の庭に立ちいづる。

詞「如何に申すべき事の候。

ワキ詞「何事にて候ふぞ。

子「鎌倉殿の御参詣。たまさかの御事にて候。御供の人々の名を知らず候。教へて賜はり候へ。

ワキ「易き間の事御尋ね候へ教へ申さう。

子「先づ一番に風折召され。念誦気高く見え給ふは。

鎌倉殿にて御座候ふか。

ワキ「あれこそ鎌倉殿候ふよ。なんぼういみじき御威光にて候ふぞ。

子「さて御供の人々の。二行に列座せられたり。先づ左の座上をば誰と申し候ふぞ。

ワキ「あれは鎌倉殿の御舅北条殿候ふよ。

子「左巴は。

ワキ 「宇都宮の弥三郎。

子 「右巴は。

ワキ 「小山の判官。

子 「松川は。

ワキ 「小笠原。

子 「さて又中座の一番は。

ワキ 「諸司の別当梶原父子。

子 「香の直垂二人はたそ。

ワキ 「一人の大男は和田の左衛門。今一人は秩父の庄司重

忠。

子 「さて其次につき出だしたる扇づかひ。

ワキ 「今此方を見候ふや。

子 「あれをば誰とか申し候ふぞ。

ワキ 「あれこそ工藤一郎。

子 「祐経候ふか。

ワキ 「暫く。かやうの所に久しくは御座なき物にて候。

此方へ御入り候へ。

シテ詞「あら珍しや箱王殿。御身の父河津殿は。赤沢山の狩くらにて。尾越の矢にあたりて空しくなり給ひたるを。某がしわざとばつと風聞仕り候。弓矢八幡箱根権現も照覧あれ。某は存ぜず候。

子「さてみづからが敵をば誰とか申し候ふぞ。

シテ「いや敵とは夏引の糸。筋なき人の言事を。かまひて用ひ給ふなよ。

子「用ひはせずと世がたりの。天に口なし人の言事。

シテ詞「それをも承引し給ふなと。

子「彼古武者の祐経に。

シテ「泣いつ笑うつすかされて。

子「さばかり猛き。

シテ「箱王も。

地「幼き身のかなしさは。誠しやかに言ひなされて。心もよわくと。あきればてたる気色かな。

地「さて頼朝は御座を立ち。く。早御下向有りしかば。御供の侍面々に。門前さして出でければ。

子「箱王は只一人。

地「講堂の庭にイみて。敵の跡を見送りて。泣くより外の事はなし。く。

子詞「よくく物を按ずるに。げに我ながら後れたり。今此時の折を得て。祐経が手にかゝらんと。同宿の太刀を盗みとり。

地「敵の跡を慕ひつゝ。駒の蹄にかゝらんと。門前さして追うて行く。く。

ワキ詞「言語道断。かゝる聊爾なる御事にて候。さやうの御心中有るならば。敵の前のたふれなるべし。只先歸りたまへとて。

地「手とり足とりいざなひ。別当の坊に帰りけり。く。

ワキ「抑仏陀の御誓願。本より衆生の所願を満てゝ。

ツレ「是も年月思ひ深き。

ワキ「箱根の海の恨みをなす。

ツレ「敵を亡ぼしたび給はゞ。

ワキ「悪魔降伏の御誓ひ。

ツレ「悪しきを平らげ善きを助くる。

ワキ「其御威光を頼まんと。

ツレ「こゝはの行者。

ワキ「十余人。

地「護摩の壇上をかまへつゝ。く。凡そ飛ぶ鳥をも。

落すばかりと面々に。刃の験徳を顕はして。

地「年頃たのみを懸くる大聖不動明王の。火焰に愚老

が其身を焦がし。五智の如来に五体を投げ。大威

徳の乗り給ふ。水牛の角に命をかけ。頭を傾け数

珠をもみ。薬師の真言千手の陀羅尼。妙音声を高

くあげ。

ワキ「東方。

後ジテ

「抑是は。中央に立つて悪魔を降伏し衆生を守る。  
大聖不動明王。矜伽羅制多伽を始めとして。

地

「五壇の上に顕はれ給へば。

シテ

「護摩の煙。

地

「不動の火焰。

シテ

「光明赫奕として。

地

「気色もあらたに五大尊の。四面の仏前に顕はれ給ひて。かの形代を調伏し給ふ。あら有難や怖ろし

や。

地

「山河草木震動し。山河草木震動して。箱根の海山の。御法もおのづから。実相の色を顕はし。自性の月の光を添へて。護摩の煙の上も隈なき。鈴の声耳に通じて。明々とすみやかなり。

シテ

「東方の降三世明王は。

地

「降三世明王は。青蓮のまなじりに悪魔を降伏して。壇上に翔り給へば。南方の軍荼利夜叉は。火焰の



ほのほを吹きかけ給へば。大威徳は水牛の。角振りたてゝ顕はれ給へば。北方の金剛夜叉は。寒風の鉄雨を降らして。大紅蓮の責めをなせば。中央の大聖不動は。さつくの縄にて祐経が。形代を巻き縛り。護摩の壇上に引き伏せて。利剣を振りあげ刺し通して。猶嚴重の奇特を見せんと。形代が首を切りて。剣の先につらぬき給へば。身の毛もよだちて面々に。目をおどろかす有様なり。さて

こそ遂には箱王も。く。其本望をば遂げにけれ。